

Artificial S 4

左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 **Mugyuda Hyogo**

2017年4月21日[金] — **5月7日**[日] *月曜休廊
午前**11**時～午後**7**時 金曜日は午後**8**時まで

KG+
Gallery P A R C
GRAND MARBLE

デタラメに言葉を組んでみました。

「左手に左目」そして「右目に右手」。

動詞も加えて、「左手に左目を持つ」「右目に右手を持つ」。

主語も要る、「私は左手に左目を持つ」「私は右目に右手を持つ」。

これらの文で表現されていることはどちらも実際にはできないと思いますが、想像を試みることはできる。

想像する。

あ、どうでしょう、これらの文を思うには、「私」の位置をそれぞれ異なるところに配置しないとイケない。

目は「私」の振る舞いの出発点になる。“見ている私”。

「私」の位置」でなんだ？ ってなるでしょうか。

この言葉に表される位置を把握するには、だれもが「私」になって想像してみるしかない。

まず「私の左手”は、私の目の前”のそして手元に見える。

つぎに左目はどうか。

左目は”私”に接続しているので、左手までこの左目を届けるには、左目を”私”から引き剥がさないといけない。

引き離されて”イメージ”となった”左目”を、私は注意深くにぎる。

左手に持たれた左目は、確かに”私自身”だけど、”私のもの”とも言えるようになり、他者としての色を帯始める。

見る側だった左目は、私に見られる側に、どうしようもなく成った。

そして左目からの視界は、遠く霞んで余所余所しくなっていく。

何にせよ、「左手に左目を持つ」を持つことに成功した。

想像だけだ。

そんで今度は右のやつだ。

右目、”右目に右手を持つ”。

難しい。でも想像なので、やってできないことはない。

では、やります。

右手をじっと見つめて・・・はいっ、右目は右手を持ちました！

右目はギュッと右手を掴んでいます。右手が痛いくらいです。

でも右目で右手を持つものだから、目の前が塞がって右目では右手以外何も見えません。

この姿を確認できるのは、左手に持たれた左目だけです。

左目は、じつとこちらを見ているのですが、右目ではそれが見えません。

左目の映像は白々しく、右手の痛みも全く共有できず、いよいよ遠い他人になっている。

左手は、徐々に乾燥していく左目の手触りにムズムズしている。

そんな余所余所しい左目と役立たずの右目ですが、

眼球の身体的な距離でない、“左目”と”右目”の眼差しの出発点の違いによって生まれる違和感が、

単一の眼差しではない関係し合う眼差し、ある位置から位置へと行き来し合う眼差しを生み出す。

この行き合う眼差し(私の位置)は、本来は異なる領域にあるはずだけど隠蔽されている

「目の前(=在るもの)と目の奥(=記憶そして因襲)」の関係をおおっぴらにするのです。

私のこのような内部の”私”の位置の在りかによって、“目の前”に在る他者の位置もかわり見え方がかわり、何かの物陰に隠れるものごとも姿を現します。

デタラメな話からでしたが、私は位置に気づくことで、距離を見つけて、そして私は「線」を引くことも覚えました。

線は視線でもあり、関係性でもあり、境界でもあります。

ここ——あそこ。

ここから～あそこまでの線。

ここまで～の「ここ」の線、あそこ～の「あそこ」の線。

こここの線からあそこの線まで。よーいドン！

すごいスピード! どんどん加速する! 「線」がみるみる世界を組み立てて行く! 世界自身も追いつけない。

線を使うと領土が生まれてしまいます。

領土は四方を眺め、四方を囲い、囲いは線で表現されます。線で囲われた世界。

世界は「世界」って言葉で表現されることで、世界って心に映る。

(世界って言葉が生まれる以前は世界はない。差異が無限だった)

それとおなじ仕組みで、具体的な線で囲われた領域から、世界は私たちの目に風景として映るようになる。

(それ以前はきっとただの眺めだった。ただと言っても見る見られるといった関係の溶け混じった家族のように親しみのある眺め)

しかし「世界」は言葉に風景にされた途端に、その世界の生き生きとした姿は言葉と風景の内側に隠蔽、抑圧され、

石油でできたような偽りの死の静寂を纏う。このような仕組みは破壊も脱出も不可能だ。

だって言葉以前、風景以前に帰ったり忘れてたりするわけにはいかないのだし。

だから、私たちは生き生きとした世界を呼び戻すことができるとすれば、それは「言葉」と「風景」からその中心から、

それ自身から出発するしかない。ゴタゴタ述べるまでもなく、私たちはそうしてきた。

ただけです、現代においては、あらゆる物事が均一化されすぎました。

差異を無視して無理矢理にでも均一化するのが、言葉や風景なのに、そのことを私たちは忘れてしまった。

私たちの感じることに先行して言葉と風景があり、言葉と風景が私たちの感性を造っている。

そして私たちは、2つある目がまるで一つしかないように思い込んでいて、だから反省のしかたもわからない。

言葉と風景をコピペみたいに途方もなく繰返した先に、私たちはいる。

言葉と風景の「元」が、もはや遠すぎて見えない。

あ　線も、言葉と風景と同じだ。

線という形は、本当はない。鉛筆で引かれた線は、線を表現したものにすぎない。

違うのは線は「線という概念」を表現しているけど、言葉と風景は、概念だけでなく表現そのものを表現している。

話長くなりました。すみません。

だから言葉や風景を生きるものにするには、「元」を振り返り思うことになるでしょう。

あ　振り返る必要もないかもしれない。

だって「元」は私たちの内部(目の奥の奥)に原初的にあるものなのだから、

新しい「元」を見つければ良いのではないのでしょうか。

弱々しいものでいいと思います。

それを発見できれば、それを手がかりに遥か遠くの「元」も見つけやることもできると思うからです。

ただし発見するや否や「元」はたちまち言葉化、風景化するので扱いが難しそうです。

もしまた遠くへ失ったとしても、また見つければよいだけです。

何度でも繰り返し続ければいいだけです。

「私」は、どの位置にいるのか、それを知り感じる事が大切です。

そして位置は、一つの固定された視点からでは確認することはできません。

「元」が原初的に内部(目の奥の奥)にあると言う理由は、

「左手に左目 | 右目に右手」の振る舞いを思う事ができるからです。

経験より先行する破綻した言葉を、生きるものになっているのは、間違いなく私だからです。

Artificial S 4

左手に左目 | 右目に右手

麥生田 兵吾 **Mugyuda Hyogo**

2017年4月21日[金] — **5月7日**[日] *月曜休廊
午前**11**時～午後**7**時 金曜日は午後**8**時まで

KG+
Gallery P A R C
GRAND MARBLE

写真家・麥生田兵吾(むぎゅうだ・ひょうご/1976年・大阪府生まれ)は主題として「Artificial S」を掲げています。

この「S」は“Sense＝感覚(感性)”などの意であり、「Artificial S」とは「人間の手によりつくられた感性・人間が獲得し得る感性」として意味付けられています。麥生田はこの「S」の探求・実験・鍛錬として、自身が撮影した写真をその日のうちにウェブサイト「pile of photographys」(http://hyogom.com)にアップするという取り組みを、2010年1月より現在まで7年以上に渡って、毎日途切れることなく続けています。

麥生田はこの主題を現在のところ7章に分類しており、2014年に本ギャラリーで開催した個展「Artificial S 2 / Daemon」では、「人の心におさまっている正体を定めないイメージを露にする」を、2015年の「Artificial S 3 / Someone(Another one) comes from behind.“後ろから誰か(他の)がやってくる”」では、「他者との関係性の中での『私』の在り処とは何? 何処?」を、2016年の「Artificial S 1 / 眠りは地平に落ちて地平」では、「触れているけれど繋がっていない、繋がっていないけれど確かに一つになっているもの＝生と死」をテーマとして切り出し、それぞれに深めています。

本展「Artificial S 4 / 左手に左目 | 右目に右手」はその4章に位置づけられているもので、「風景」をテーマとして構成されます。

私たちの目の前には「風景」があり、だから私たちは「風景」を見る。しかし、「風景を見る」とはどういうことでしょうか?　そもそも「風景」とは何でしょうか?

『見る』は、目の前に現れた「未知(理解できないもの)」と出会う瞬間のことです。また、『見る』は、その瞬間から目の前に在るものを「概知(理解できるもの)」として捉えようとすることです。そして、この「理解する」とは、記憶や経験に基づいた「認識や定義」によるものであるといえます。つまり、「私」という同一の視点(目)から見る世界は、「私の目の前に在る」ものと「私の記憶や経験に在る」ものであり、また、そこに生じた差異を含んだものであるといえます。そして、その差異はまた、『見る』という「観察(好奇心)」の眼差しが向けられるのだとも思えます。

『見る』は、未知から概知への均一化の流れの中にあると言えます。しかし、現代の私たちは、目の前に在るはずのたくさんの差異を、たとえば『風景』という言葉によって瞬間的に「言語化」し、均一で理解可能な箱庭(＝風景化)とすることに馴れてしまいました。あるいは入手できる情報量の増大が、「未知」に触れる機会を減少させているのかもしれませんが。そして、私たちは未知と出会う『見る』、観察の眼差しとしての『見る』を失い、いつしか「概知」しか「見えなく・見なく」になっているのかもしれませんが。

本展において麥生田は「風景」をテーマに、差異を持った視線を写真(あるいは展示空間)内に交錯させることで、現在の私たちの「見る」に起きていることを少しだけ顕在化させます。展示された作品にはいずれも　私の・私たちの・誰かの・何かの　「視線」が存在しています。また、その視線を頼りに、それぞれの作品を「見る」私たちは、いつしか自らが投げかける視線の存在や、自らの内側にある異なる視点の存在に気づくのではないのでしょうか。

本展タイトルにある「左手に左目、右目に右手」を想像の中でなぞり、そこに何が見えるかを思う時、私たちは、「見る」の出発点にある「私」の内に、すでに(あるいは、ずっと)異なる視点が在ることを発見します。また、目の前の均一化された「風景」に様々な差異を「見る」ことは、ふたたび「私」の位置を知ることにも回帰するものです。

そして、そのささやかでいて、元の場所に戻るわけではない循環の体験が、私たちの「見る」が持っていた観察の眼差し、好奇心という「見る」の源泉を少しだけ回復することになるのではないのでしょうか。

※本展協力: いくしゅん、金氏徹平、木村友紀、金サジ、佐伯慎亮、仲川あい、中澤有基

※本展は[KYOTOGRAPHIE 京都国際写真展 2017]のサテライトイベント「KG+2017 スペシャルエキシビジョン」にエントリーしています。

Artificial S 4
Gallery P A R C
GRAND MARBLE

略歴 | C.V

麥生田 兵吾 | Mugyuda Hyogo

http://hyogom.com

1976　大阪に生まれる　　現在、大阪府在住

2010　「pile of photographys」をweb上で発表開始(現在継続中)
2010　「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2010」(3331千代田ARTS / 東京):「Zine port」の員としてZineを出品
2011　「THE TOKYO ART BOOK FAIR 2011」(3331千代田ARTS / 東京):「Zine port」の員としてZineを出品
2011　「in the waitingroom」(waitingroom / 東京)
2013　「溶ける魚 つづきの現実」(京都精華大学ギャラリーフール / 京都、Gallery PARC)
2014　個展「Artificial S 2 - Daemon-」(Gallery PARC)
2014　「2014 FOIL AWARD in KYOTO」(FOIL GALLERY / 京都)
2014　キャンン写真新世紀2014 佳作受賞　清水穰選
2015　個展「Artificial S 3 - Someone (Another one) comes from behind.“後ろから誰か(他の)がやってくる”-」(Gallery PARC)
2016　個展「Artificial S 1 - “眠りは地平に落ちて地平”」(Gallery PARC)
2016　「Emerging KG+ 2016 supported by LUMIX x YellowKorner」(　ロームシアター京都 / 京都)
2016　「showcase #5 “偶然を拾う- Serendipity”」(eN arts / 京都)
2016　自主企画展「scene | space」(STUDIO MONAKA / 京都)
2017　「showcase #番外: スナップショット、それぞれの日々」(galleryMain / 京都)

主な出版
2014　雑誌「FOIL vol.4(2014) FOIL AWARD in KYOTO」に作品掲載

Artificial S 4
Gallery P A R C
GRAND MARBLE

展示作品 | works

上段**①**　人々によるパースペクティヴ

中段**①**　人のいる風景

下段**①**　人のいない風景

②　間風景
③　K氏の作品と人
④　間風景
⑤　I氏の作品と人
⑥　間風景
⑦　S氏の作品と人

上**⑧**　左手に左目 | 右目に右手

下**⑨**　風景 1 (AS4)

⑩　外側から投げる
⑪　風景 2 (AS4)
⑫　目から目へ投げる

⑬　セルフイー
⑭　風景 2 (AS4)
⑮　●を投げる
⑯　内側へ投げる

⑰　スイハー ①
⑱　スイハー ②

⑲　シャセー
⑳　●々によるパースペクティヴ

